

いれいさい  
今も続く慰霊祭

# 語り継ぐ6月7日



崇禅寺の慰霊祭

崇禅寺の慰霊碑



善教寺の慰霊祭



柴島高校の正門のそばにある彫刻『奪われし者の叫び』も当時の惨状を伝えている



## 6月7日。東淀川区が大空襲に見舞われた日を語り継ぐ催しは今もなお続いている。

70年前の大阪大空襲で、長柄橋周辺で400人にのぼる人々が亡くなった。首が吹き飛んだ赤ん坊をおんぶして逃げまどう女性、全身黒く煤けた死体の山…“地獄の長柄橋”と呼ばれ語り継がれるこの日の惨状を実際に知る人は少なくなっているが、今も区内各地で慰霊祭が開かれている。

平成27年6月7日朝10時。まさに空襲に見舞われたその時間。崇禅寺境内の大きなクスノキの下には黙祷を捧げる150人近い人々の姿があった。戦後すぐに始まった慰霊祭に参加する人々は年齢を重ね、数も減っていたが、あれから70年の節目となる今年は中学生や高校生も含め多くの方が参加した。崇禅寺自体も空襲で爆撃を受けほぼ全焼したが、多数の死者が運び込まれ、崇禅寺前住職・西岡祖学さんが埋葬したのち、8年後、そのままでは気の毒だと掘り起こし火葬・改葬して、戦災死者慰霊碑を建立した。現在518名の名前が刻まれている。毎年この日に慰霊祭が開催されているという。この日は昭和58年に発行された戦争体験集『ながら』より、西岡さんの手記が朗読

され、そこに記される生後2日で奇跡的に助かった松原俊明さん(70)の姿もあった。

長柄橋の慰霊のため建立された観音菩薩像前でも北区にある正蓮寺と遺族が慰霊祭を営んでいる。

『ながら』で紹介されていたもう一つの慰霊祭の場所は柴島にある善教寺。当時の住職辻本真純さんが空襲の犠牲になった58人を穴を掘ってそのまま埋めたが、13年後掘り起こし火葬、慰霊したという話だ。果たして今も続いているのかと不安になりながらも訪ねてみた。

境内には慰霊碑があり、その前で真純さんの孫、辻本芳真さん(47)が家族や参列者とともにお経をあげていた。「私はもちろん、今日お集りの方々も当時の様子をご存知ないと思います。それでも毎年続けようと思っています」という芳真さん。

東淀川区内ではこの日、他にも各地でひっそりと慰霊祭が開かれている。「6月7日」の記憶はこうして語り継がれていくのである。

### i nterview 奇跡の子どもも70才に。

生後2日目に崇禅寺の離れで空襲に見舞われた松原俊明さん(70)。「枕元に爆弾が落ち私を抱いて境内に逃げようとした母は機銃掃射で眉間を打たれて即死しました。私は母に守られて命を取り留めたんです。もちろん覚えていませんが、親戚が集まるたびにその話は聞かされてきました」という松原さん。70才になる今年、初めて慰霊祭を訪ねたという。



松原俊明さん